

平成18年 6月1日	農作物病虫害発生予報 6月	山口県病虫害防除所 山口県農業試験場
---------------	--------------------------------	-----------------------

～目次～

予報の概要	1
予報	
【主要病虫害】	2
【その他の病虫害】	5
病虫害・農薬情報	
病虫害メモ - スクミリンゴガイの防除対策について	6
農薬メモ - 土壌消毒剤の利用について	6
参考	7

予報の概要

農作物名	病虫害名	予想発生量	現況	
			平年比	前年比
イネ	いもち病(葉いもち)	やや多	-	前年並
カンキツ	かいよう病	やや多	やや多	少
	ミカンハダニ	平年並	平年並	少
ナシ	黒斑病	やや多	平年並	前年並
果樹全般	カメムシ類	やや多	平年並	多

作物	担当者
普通作	野崎(病害) 中川浩二(虫害)
果樹	藤村(病害) 殿河内(虫害)
野菜	岡田(病害) 岩本(虫害)
茶	中川浩二(病虫害)

お問い合わせ先	
TEL	(083) 927-4006
FAX	(083) 927-4071

予報

【主要病害虫】

イ ネ

1 いもち病（葉いもち）

(1) 予報内容

予想発生量	防除時期
やや多	発病初期 (平年初発生時期：6月23日)

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬の共同育苗施設における聞き取り調査では、苗いもちの発生は34施設中1施設で認められ、前年並みであった(±)。

イ 気象予報では、6月の降水量は平年並みか多く、日照時間は平年並みか少ない(+)

(3) 防除対策

< 耕種的防除 >

補植用苗は発生源となるので、補植が終わり次第早急に処分する。

< 防除判断 >

ア 発病を認めたら直ちに防除する。

イ 6月21日に中山間地域を対象に長期予報を発表する予定である。

< 防除のポイント >

長期持続型箱施用剤は、次の条件では効果が不安定になる場合があるので、これらの薬剤を施用したほ場でも発生予察情報に注意するとともに、ほ場の見回りを行い、早期発見、早期防除に努める。

- (ア) 冷夏長雨等による多発生 (イ) 常習発生ほ場
- (ウ) 冷水があたるほ場 (I) 漏水ほ場
- (オ) 苗いもちを持ち込んだほ場

カンキツ

1 かいよう病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	少	6月上旬 6月下旬

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬の巡回調査では、新葉での発生ほ場率は13.6%(平年7.3%)、
発病葉率は0.1%(平年0.3%)で平年に比べやや多かった(+)。

イ 気象予報では6月の気温は平年並みで、降水量は平年並みが多い(+ ~ ±)。

(3) 防除対策

< 防除判断 >

発病しやすい品種で開花後の防除を実施していない場合

6月上旬と6月下旬の2回防除を実施する。

発病しやすい品種で既に開花後の防除を実施している場合

6月下旬に防除を実施する。

発病しやすい品種と隣接した園やこれらを混植した園及び幼木園

温州みかんなどの発病しにくい品種でも多発することがあるので発生状況を確認し、発病が認められた場合には早急に防除する。

< 防除のポイント >

ア 発病した枝や葉は伝染源となるので、できるだけ除去する。

イ 防風樹や防風網を適正に管理し、強風により枝葉や果実に傷が付くのを防ぐ。

ウ コサイドDFやZボルドーなどの無機銅水和剤を散布する場合は、薬害を防ぐため炭酸カルシウム水和剤(クレフノン)200倍を加用する。

エ ICボルドー66Dは高温期に使用すると薬害を生じやすいので、7月から9月の使用は避ける。また、マシン油乳剤との1か月以内の近接散布も避ける。

オ ミカンハモグリガ(エカキムシ)の被害は本病の発生を助長するので、ミカンハモグリガの防除を徹底する。

2 ミカンハダニ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	防除の目安を超えたとき 寄生葉率30~40%以上 または雌成虫1葉当たり0.5~1頭以上

(2) 予報の根拠

5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率22.7%(平年39.4%)、寄生葉率1.0%(平年2.8%)、10葉当たり雌成虫数0.2頭(平年0.5頭)で平年並みであった(±)。

(3) 防除対策

< 防除判断 >

防除の目安は、寄生葉率が30～40%以上、または雌成虫密度が1葉当たり0.5～1頭である。

<防除のポイント>

- ア 発生量はほ場によって大きく異なり、特に交互結実園の生産樹で多発していることがある。また、気温の上昇に伴い急激に密度が増加することがあるため、定期的にはほ場を見回り、発生状況を確認する。
- イ 葉裏までムラなくかかるよう十分な薬量を散布する。

ナ シ

1 黒斑病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	平年並	前年並	大袋かけ前～ 大袋かけ後

(2) 予報の根拠

- ア 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率70.0%(平年66.0%)、発病葉率1.2%(平年1.6%)、発病新梢率4.2%(平年3.1%)で平年並みであった(±)。
- イ 気象予報では6月の気温は平年並みで、降水量は平年並みか多い(+～±)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

- ア 徒長枝の発病が多くなる時期であり、徒長枝の先端まで薬剤がかかるよう、ていねいに散布する。
- イ ポリオキシシン剤及びロブラール剤は県内全域で耐性菌が発生しているため、年1回程度の使用にとどめる。

果樹全般(モモ、ナシ)

1 カメムシ類(チャバネカメムシ、ツアカメムシ、クサギカメムシ)

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	平年並	多	園地への飛来を確認した時

現況は予察灯調査による

(2) 予報の根拠

ア 昨年のスギ、ヒノキの花粉飛散量は多く、越冬量が多いと考えられる(+)。

イ 県内4カ所のフェロモントラップにおけるチャバネアオカメムシの5月の誘殺数は前年並み~多かった。特に山口市の農業試験場落葉果樹試験地では過去7年で最も多く、291頭(平年78頭)であった(+)

(3) 防除対策

< 耕種的防除 >

常発園では、ネット(網目4mm以下)で園全体を覆い侵入を防ぐ。

有袋栽培では袋かけを早めに行う。

< 防除判断 >

無袋栽培園では園内の発生状況や周辺の灯火を観察し、飛来がある場合は防除する。

< 防除のポイント >

ア カメムシ類は主に夜間に果実を加害するので、薬剤防除は夕方に行うのが効果的である。

イ カメムシ類に対する飛来時以外の薬剤散布は効果がないだけでなく、ハダニやカイガラムシの増殖を招く場合があるため、スケジュール散布はしない。

ウ 今年は収穫直前まで防除が必要となる可能性があるため、収穫前日数や使用回数を考慮して薬剤を選択する。

【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想発生量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年(%)	平年(%)	
イネ	イネミズゾウムシ	平年並	平年並(予察灯)	前年並(予察灯)	-	-	成虫密度が100株当たり50頭未満であれば防除は必要ない。
	ニカメイガ	平年並	平年並(予察灯)	前年並(予察灯)	-	-	-
カンキツ	そうか病	平年並	平年並	前年並	13.6	15.5	り病葉は見つけしだい除去する。
ナシ	赤星病	平年並	平年並	前年並	20.0	15.0	
	黒星病	平年並	平年並	前年並	0	0	

病虫害・農薬情報

病虫害メモ

スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）の防除対策について

近年、県内の水田等でスクミリンゴガイが分布を拡大し、移植直後のイネ稚苗などを食害し被害を与えています。

本貝は、別名ジャンボタニシと言われているとおりタニシと比べずんぐりして大きいことや、コンクリート塀などにピンク色の卵塊を産み付けることで他の貝類と見分けことができます。

この貝が一旦ほ場に侵入すると、根絶することはほとんど不可能です。

既に発生を認めている地域での防除対策としては、被害軽減(密度抑制)対策として貝や卵塊の捕殺、厳冬期のほ場耕起、ほ場の取水口への金網等の設置によるほ場の侵入防止などの物理的防除、成苗移植やほ場の浅水管理などの耕種的防除、石灰窒素や農薬の散布などの化学的防除、拡大防止対策としてほ場の排水口への金網等の設置等が考えられますが、各対策を組み合わせ、地域全体で組織的、計画的に取り組む必要があります。

また、未発生地域ではこの貝を不用意にほ場等へ持ち込まないことも含め、ほ場等に侵入させないことが最も重要です。特に、近隣に既発生地域がある場合、侵入防止網等の設置を行う等、侵入警戒対策を徹底する必要があります。

これまで、本貝の発生がなかった地域で、新たに発生を確認した場合は直ちに病虫害防除所まで連絡をしてください。

(専門研究員 中川浩二)

農薬メモ

土壌消毒剤の利用について

土壌消毒剤にはクロルピクリン剤、D-D剤、DCIP剤、カーバム剤、メチルイソチオシアネート剤、ダゾメット剤等があり、これらの薬剤はガス化して殺菌・殺虫・殺センチュウ・殺草作用を発揮します。処理時には、以下のような注意が必要となります。

- 1 前作の植物体残渣は土壌消毒の効果を低下させるおそれがあるため、薬剤処理までに必ず取り除き、耕耘機で耕起・整地する。
- 2 アルカリ性肥料施用直後にメチルイソチオシアネート剤、ダゾメット剤を施用すると薬害を生じる場合があるため、石灰等は処理10日以上前に施用する、もしくは処理後十分ガス抜きしてから施用する。

- 3 十分な防除効果を発揮するためには、土を手で握ったときに軽く固まりができる程度の土壌水分が必要であるため、処理前日までに土壌水分管理を行う。
- 4 薬剤処理時やガス抜き作業時には、必ず専用の保護マスク、保護メガネ、ゴム手袋、合羽、長靴を着用し、薬剤の吸入や皮膚への接触を避ける。
- 5 薬剤処理後は防除効果向上とガス飛散防止のため、必ずビニールシート等でできるだけほ場全体を被覆する。
- 6 処理後は一定のくん蒸期間をおき、ビニールシート等を除去する。ガス臭がする場合は耕耘機で2～3回耕耘し、ガスを完全に抜く。ただし、DCIP剤を処理した場合はガス抜きが不要である。
- 7 地温が低い(10～15 以下)時期や連続降雨などによる土壌水分過多時、粘土質土壌で処理する場合は、ガスが抜けにくく、作物に薬害が生じる恐れがあるため、播種・定植まで長期間おくか、耕耘によるガス抜きの回数を多くする。

【農業試験場で取り組んだ臭化メチル代替技術：メロンえそ斑点病】

臭化メチル代替技術として、クロルピクリン・D-Dくん蒸剤(商品名：ソイリーン等)のマルチ後畝内処理の効果が高いことを確認しています。被覆資材として高气密性フィルム(商品名：バリアスター)を使用すると防除効果が高まります。

(研究員 岡田知子)

参考

1 予報の見方

(1) 病虫害発生量の基準(原則として過去10年間の発生量と比較)

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	〃 で標準的にみられた発生(上記4項目を除くもの)

(注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる)

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	〃 前年の評価より少ない発生
前年並	〃 前年の評価と同等の発生(上記2項目を除くもの)

(2) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1か月気象予報(5月19日福岡管区気象台発表)

予報	高い(%) 多い	平年並(%)	低い(%) 少ない
気温	30	40	30
降水量	40	40	20
日照時間	20	40	40

週ごとの気温傾向

予報	高い(%)	平年並(%)	低い(%)
1週目	40	40	20
2週目	30	40	30
3~4週目	30	40	30

3 6月のテレホンサービスの内容(予定) TEL(083)927-4649

時期	内 容
上旬	6月の発生予報、イネいもち病の防除、ダイズの種子消毒、カンキツ病害虫の発生状況と防除、ナシ黒斑病の発生状況と防除、イチゴ炭疽病の防除
中旬	イネいもち病の防除、ナシ黒斑病の防除
下旬	イネの葉いもちの長期予報、イネのウンカ類の防除